

# 「あたりまえ」なことを「あたりまえ」にしてもらう支援

## 入所施設における最重度知的障害・自閉症・強度行動障害の成人男性へのQOL向上の支援

～To get help for granted that natural～

○樋口雄亮・加藤佳子・近藤加奈子・桂木三恵

Yusuke TOIGUTI, Yoshiko KATOH, Kanako KONDOH, Mie KATURAGI

愛知県心身障害者コロニーはるひ台学園

AICHI PREFECTURAL COLONY

Key words: QOL, 福祉施設、自閉症

### 目的

福祉施設では、利用者に対して、私たちが日常「あたりまえ」に行っていることで保障されていないことが非常に多くある。

当実践では、重度の知的障害や破壊、こだわりといった行動障害を理由とし、寝具の提供がままならず、作業グループへの参加も検討されなかった自閉症男性の生活改善を目的とした。

### 方法

**対象者)** 43歳自閉症男性。発達年齢1歳6ヶ月、発達指数10未満であった(H13年9月時点)。脱衣、破壊、放尿便などの問題行動があり、「対応が難しい」というイメージを持たれていた。元々寝具の利用は、毛布は細切れにし、敷布団は中綿を出すなどの問題行動があった。トークンでのやりとりを日常に取り入れていた。桂木ら(2001, 2008)と同様の対象者であった。

**手続き)** ①敷布団の使用: 桂木(2008)では寝具は毛布1枚のみ使用していた。起床時に全く破壊がない毛布と交換で本人の好物とされる菓子少量を渡した。毛布が破壊された場合は、日中に新しい毛布を2トークンで提供した。20日間連続して破壊がなかった際に敷布団を提供し、就寝を試みた(2008年8月)が、1回目の提供では3日目、2回目の提供では4日目で破壊され、本人が中綿で遊ぶことが習慣になるのを防ぐため中止した。その後寝具を毛布2枚とし、長期間破壊がなく就寝できるようになった。敷布団の利用については、検討はされていたが、他の利用者支援や日常業務などの関係上、支援に至らなかった。

2011年6月から8月までの3ヶ月間、2週間に2～3回のペースで一部の職員により毛布と共に敷布団の提供を試みた。起床時、提供した寝具に破壊がなかった場合は菓子を渡し、破壊があった場合は新しい寝具を2トークンで提供した。その結果を見て、9月から敷布団を毎晩提供することとした。敷布団の破壊が2日間連続してあった場合、翌日は毛布2枚での就寝に戻し、翌々日に2トークンで敷布団を提供した。

②作業への参加: 2009年5月から週1回、職員と本人のみ作業室に入って課題を行った。課題は確実に達成できる内容とした。ペグさし100個を行い、所要時間は15分程度であった。課題終了後は本人の好きな(作業室限定閲覧)雑誌を渡した。作業時、課題を投げる、着席せず走り回るなどの逸脱行動があった場合は、投げた課題は本人が片付け、個室でカムダウンし、作業をやり直した。2010年2月から週1回、複数の利用者と一緒に作業室で課題を行った。今までの手続きに加え、課題終了後にシールを渡し、シールが4枚貯まったら、母と近くの売店へ買い物に出かけた。買い物に出る日は、母の都合に合わせて設定し、シールが貯まった日から一番近い日とした。売店では、好きなお菓子1個と雑誌1冊を本人が選び、支払いは母が行なった。

### 結果

①敷布団の試行は14回行い、2回破壊があった。試行期間中は、

日中に脱衣する、対象者が提供した寝具を居室から出して放便するといった問題行動が見られた。毎晩敷布団の使用を開始して以後は、23回連続で破壊がなかった。1回破壊があったが、以後破壊はなかった。

②作業室へ行き、集団の中で課題を行なえるようになった。また、シールを貯めて毎月1回、母または職員と買い物に出ることができた。外出中の問題行動は全くなかった。開始当初は課題を投げる、走り回る、参加を拒否し動かないことがあったが、徐々にその回数は減少し、現在は3ヶ月に1回ほどとなった。

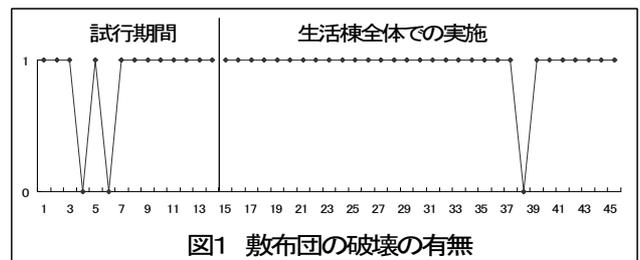


図1 敷布団の破壊の有無

### 考察

当実践により対象者が適切に敷布団を利用できるようになった。試行期間中に日中の対象者の問題行動が悪化し、敷布団の提供に不安はあったが、敷布団の試行では破壊なしが続いていたため、支援を進めることとした。支援を進めたことで本人に快適な環境を提供できるようになった。両立しえない行動が強化されたため、問題行動がなくなったのではないかと考えられる。積極的に良い行動を引き出し、強化していくことが大切であると考えられる。また、対象者が作業へ参加できるようになり、母と2人で買い物に行くことができるようになったことで、活動範囲を広げることができ、本人のQOLの改善・向上へつながったと考えられる。しかし、当施設では積極的に支援が行われない「文化」があり、職員側の事情で支援開始までに時間がかかってしまう問題があった。

今後も、より快適な状態で睡眠が取れるように支援し、作業内容の拡充や活動範囲の拡大を目指したい。そのためには、職員自身が施設という閉鎖的な環境に身を置いていることを意識し、内外からの評価を受けるために絶えず情報公開すること、常に施設外の世界の「あたりまえの感覚」を持って対象者に必要かつ適切な支援を行なうことが重要であろう。

### 参考・引用文献

桂木・織田・丹羽・鶴飼・不動・近藤・小嶋(2001)福祉施設における行動的QOL向上のための実践と課題(2)『立命館人間科学研究』2巻、85-102

桂木(2008)問題解決ではなく、楽しいことを増やす支援のススメ『知的障害福祉研究さぽーと』No. 620、38-43